

● 第6回編集講座  
「多くの人に本を届けるために編集者がすべきこと」



第6回編集講座は、シリーズ累計で450万部を突破した『子育てハッピーアドバイス』の編集を手掛けた、株式会社1万年堂出版社長兼出版部長である山崎豊氏をお迎えし、「多くの人に本を届けるために編集者がすべきこと」をテーマに講演いただきました。  
本づくりの企画、編集、販促の大切な情報源として重視している愛読者カード（読者アンケート葉書）の活用方法や、書店に置いてもらうために工夫されているポイントについて、豊富な配布資料をもとに実例を挙げながら丁寧にお話いただきました。

● 2014年賀詞交換会 開催



去る1月16日（木）、四谷荒木町の「炙蔵 柳」にて、賀詞交換会が開催されました。  
今年の会では落語協会所属の女性三味線ユニット「東京ガールズ」のお二人をお招きし、「都々逸」「さのさ」「長唄」など、お正月に相応しい日本の伝統芸を披露していただきました。  
こうした生の演奏を目の前で楽しめるのは滅多にない機会。参加者の方々には「高齢化社会のアイドル」＝東京ガールズの洒落の利いた「都々逸」や粋な「さのさ」、迫力ある「長唄」の演奏をこころから楽しんでいただけたようです。

● 第7回編集講座  
「印刷の知識（工場見学）」凸版印刷 板橋工場



第7回編集講座は、「印刷の知識」をテーマに講義形式ではなく、実際に本が作られている現場を体験するため凸版印刷板橋工場で行われました。  
はじめに板橋工場の概要と印刷の基礎について伺ったのち、約2時間かけて普段は見ることができない実際の製版、印刷、製本が行われている過程を解説いただきながら見学しました。

● 教材部会 開催

3月6日（木）、6社7名の皆さまにお集まりいただき、教材部会を開催いたしました。「教材業界における“デジタル”」を中心テーマとして、各会員社のデジタルへの取り組み状況を互いに紹介し合うなど、幅広く意見交換することができました。デジタルに対してどう向きあうべきか、という話で盛り上がり、「最先端の技術を追いかけても大企業にはなかなかかなわない。我々の基本価値は、学習コンテンツであり、学習メソッド。そこを見失ってはいけない」という各社の強みを再認識し部会を終えました。少人数でしたが、実り多き会になったと思います。  
ご参加くださいました会員社の皆さま、誠にありがとうございました。



○ 訃報

当協会の会員社である、株式会社カイトの代表取締役土屋達彦氏が、去る1月23日にご逝去されました。享年72歳でした。  
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

# EDITORIAL MAGIC

2014.03.31 TOTALING NO.113  
No.16

巻頭特別インタビュー

作家 末井 昭 氏

## 作家と編集者の 理想の関係

制作の現場探訪 vol.16

株式会社カルチャー・プロ 代表取締役社長 須藤 靖夫 氏

## 紙媒体でもデジタルメディアでも 教育哲学を持つ教材編集者であれ

**AJEC**  
<http://www.ajec.or.jp/>



# 作家と編集者の理想の関係

作家  
末井昭氏  
Akira Suei

「写真時代」「パチンコ必勝ガイド」など伝説の雑誌編集者・末井昭さんがセンセーショナルなタイトルで話題のエッセイ集『自殺』を2013年末に刊行した。当初、編集者の依頼には乗り気でなかったという著者がどのようにして一冊の本を世に送り出すに至ったか。その一部始終を聞いた。

## Profile

作家  
末井昭氏 Akira Suei

1948年、岡山生まれ。エッセイスト・編集者。工員、ピンクサロンの看板描きを経てイラストレーターとして出版業界へ。その後、雑誌編集も任せられ編集者となる。

1976年にセルフ出版(現・白夜書房)の創設に携わり、たった一人の社員として入社。数々の雑誌を創刊し、多くの作家や芸術家たちと共同作業をしてきたが、中でも写真家の荒木経惟さんとの仕事は有名。2012年に白夜書房を退社し、現在はフリー編集者兼作家として活躍中。平成歌謡バンド「ベーツ」のテナー・サクソ奏者という一面もある。

## 編集者の粘り勝ちから始まった書籍づくり

——現在四刷りということで、自殺をテーマにしたものとしては売行きが好調です。何がきっかけで始まった企画なんですか？朝日新聞に記載された「自殺予防」をテーマにした僕のインタビュー記事がきっかけです。僕が小学一年生の時、母親が隣の家の青年とダイナマイト心中をしたというのがあったので、朝日新聞ではそんな体験も含めて話したんですが、その記事が出てから半年後ぐらいに朝日出版社の鈴木久仁子さんから手紙をもらったんです。手紙には「自殺の本には手が伸びにくく、積極的に読みたい、人に薦めたいと思える本と出会

えていません。『これなら読みたい』と私が思える、面白い本を、末井さんとつくりたいです」とあったんですが、自殺って微妙なテーマじゃないですか。子どもに自殺されてしまった両親が読むかもしれないし、面白く書けと言ったって迂闊なことは書けませんよね。だから、最初は書く気が起こらなかったんです。

——では、最初はまったく乗り気じゃなかった？だって、楽しくないじゃないですか。ギャンブルの話を書けというのなら面白く書けますけど、自殺ではねえ。僕が文章を書いてうれしいと思うのは、自分の文章で読者が笑ってくれることなんです。だけど、自殺がテーマだったらそれは難しいんじゃないかと思いましたね。それに、自殺のことなんか書いても売れないだろうと思ってましたから。

——末井さんが作家ではなく編集者の立場でも売れないだろうと感じましたか？

そうですね。僕はもともと雑誌編集者で、主にエンターテインメントを中心にやってきたから、全然世界が違うわけですよ。おそらく会社で自殺の企画書を出したとしても誰一人賛成する人はいなかったと思いますよ。それに、本のイメージがつかめないわけですよ。自殺の統計とかを集めて真面目に書いても面白くないし、茶化すわけにもいかないし、どんなことを書けばいいのかまったく見当がつかなかったんです。

——最初の依頼から末井さんが書く気になるまで相当時間がかかったみたいですね。

一年かかりましたね。手紙をもらった後、鈴木さんと会って打ち合わせをしたんですけど、二人とも人見知りだったので、最初はボソボソ何か話しました。何を話したか全然覚えていませんけど。そのうちに徐々に打ち解けていっていろんなことを話すようになりました。だけど、やっぱり書く気にはならないんですよ。でも鈴木さんはあきらめないんです。だいたい二ヶ月に一回のペースで自殺に関する統計資料を持ってきてくれたりするんです。そうすると、僕もだんだん鈴木さんに悪いことしてるような気がしてくるじゃないですか。資料を集めるのも手間暇かかっているだろうし、むげに断るのも悪いなあ、と。で、だんだん断れなくなってしまったことと、鈴木さんと話しているうちに、もしかしたら書けるんじゃないかという気にもなっていくんです。それが決定的になったのは、東日本大震災でした。誰しもそうだと思いますが、あの震災を契機に「何かしないといけない」という気持ちになりましたからね。

## 作家と編集者のコミュニケーションのあり方

——お母さんの自殺体験というのも、書く気になれなかった一因ですか？

いや、それはすでに『素敵なダイナマイトスキャンダル』という本で書いているので抵抗はないんです。その経験を免罪符にして書けば大丈夫かなあとは思っていました。

鈴木さんとの打ち合わせの中で、「お母さんの自殺も含めて、自殺に対してどういうふうになっているんですか？」と聞かれたことがあって、その時、僕は「自殺している人を引き止める気もないし、『自殺しろ』というつもりもない。どちらかという、『自殺しないでほしい』というふうに考えている」と答えていたらしいんですね。答えていたらしいというのは、自分が言ったことを忘れちゃってるからなんですけど、鈴木さんは覚えてるんです。とても記憶力がいい人なんです。別にメモをとるわけではないのに僕の言うことを覚えていてくれて、いざ原稿を書くという段になった時、「僕がこういうことを言っていた」と教えてくれるんです。「じゃあ、それをテーマに一本書けるね」というふうにやりとりを重ねていきました。

——編集者が一方的にテーマを与えるのではなく、末井さんとのコミュニケーションの積み重ねの上に練り上げられていった本なんですね。それってとても良好な関係ですよ。

本当にそうだと思います。この本は鈴木さんと一緒につくったという感じです。決して、鈴木さんにテーマをもらって、自分ががんばって書いたというものじゃないんです。お互いコミュニケーションをとりながら、ああでもないこうでもないというふうに二人で書いた本でした。けれど、それを鈴木さんに言う「いや～、私は何もしていませんよ」と謙遜するんです（笑）。でも、僕は鈴木さんがいたから書けたと思うし、他の人が編集者だったら書けなかったかもしれません。だいたい一年間もほったらかしにしていたら、普通みんなあきらめるじゃないですか。

みんな、忙しいですね。

——この本は、ブログ配信をした後、その内容を一冊にまとめられたんですね。ブログから書籍という流れは企画段階で決まっていたのですか？

はい。一冊丸ごと書けて言われても無理なんで、月一のペースでブログで配信することにしました。まずテーマをいくつかピックアップするところから始めて、書けるテーマから順々にブログを更新していく形をとりました。なので、ブログと書籍では構成が変わっています。書籍の目次案は鈴木さんがつくってくれたのですが、ブログより書籍はしっくりした流れになってます。

——原稿ができてから、編集者の指示で原稿を書きかえた部分はありますか？

文体は変えてないですが、内容は結構書きかえましたね。鈴木さんはしつこいと言ったら失礼かもしれないけど、結構細かく原稿を見ていってくれます。僕は鈴木さんに言われるままかなり書き直しました。

——具体的にどのように指摘されたんでしょうか？

鈴木さんは「ここは（読者に）届くと思います」という言い方をします。ということは、届かない箇所があるんだと思うじゃないですか。鈴木さんにはあらかじめ何でも気がついたことは言って欲しいと伝えていたので、かなり細かいところすべて指摘してくれましたね。読者に届くか届かないかに関しては厳しんです。

——あくまでも「届く」で「届かない」とは言われなかった？

「届かない」とは言わない。編集者は著者の書いたものを否定はしませんよね。もし

否定されたら、こっちもやる気がなくなるし、それはありませんね。「もうちょっとこの内容を深く知りたい」という言い方をしてくれました。特に、「聖書との出会い」という章ですけど、あれは10回くらい書き直しました。あの時は、もう永遠に終わらないんじゃないかと思ってましたね。最初はものすごく理屈っぽく書いていたんですよ。あと聖書や千石さんの言葉の引用も多かったし。鈴木さんは「引用よりもご自分の言葉で書かれたほうが届くと思いますよ」とメールしてくれて、「あ、やっぱりこれだと分かりにくいか」と思ったりしましたね。

——末井さんは編集者の求めている意図を大事にされたんですね。

それは大事にしますよね。最初の読者ですからね。編集者の指摘は、一般読者がどういうふうにこの本を読むかという指針になりますから。あと、ブログで配信していたから、Twitter上の読者の感想とかも参考にはしていました。「穏やかだけど凄みがある」とか「面白くて一気に読んだ」とか「内容が真っ直ぐ伝わってくる」とか、Twitter上の感想にすごく励まされました。

**作家自身が行うプロモーション活動**

——末井さんのTwitterを拝読していると、書店まわりを精力的になされていますが、末井さん御自身、編集者時代によくされていたことなんですか？

いえいえ、まったくしていませんでした。僕は雑誌編集者だったので、書店との接点はなかったんです。雑誌の場合は、取次ぎに雑誌を納めたら、自動的に書店に配本さ

れるので書店とつながりはありませんでした。それに僕は営業でもありませんでしたしね。だから、書店まわりをしたのは『自殺』が初めてです。雑誌をつくっていた頃は書店に対する意識ってそれほど高くなかった。書籍と違って雑誌は書店に置いてある期間が短いでしょ。週刊誌だったら五日間ぐらい。月刊誌でも三週間が限度ですから。僕が書店をまわろうと思ったのは、朝日出版社で『自殺』が出る前にゲラを希望してくれた書店に送って、コメントを書いてもらったんです。そのコメントを見た時からですね。そのコメントを集めて販促用にチラシをつくったんです。コメントを読んでも、僕が思っていた以上に応援してくれている書店員さんが多くて、その人たちに会いに行きたいと思ったのが書店まわりのきっかけですね。「この本が浸透することで、日本の自殺者数は、リアルに減少させられる。つまり本屋で人の命を救うことができる。これほどやりがいのある仕事は、なかなかないですよ!」という書店員さんの言葉を聞いた時は涙が出ましたね。これまで約30軒の書店をまわっています。

——書店まわりをする時はどのようにしていましたか？

基本は営業担当の人が事前に書店に連絡してくれて、編集者の鈴木さんと営業担当者と三人で行くんです。手書きPOPと色紙、そしてサイン本をセットという形で。基本は平積みをしている書店を中心にまわりました。サイン本は書店でつくんですが、中にはこんなにサインして大丈夫なの?という書店もありましたね。というのは、サインした本は返品できませんので、こっちが心

Book 『自殺』

発行：朝日出版社

母親にダイナマイト心中された経験を持つ末井さんが、世の中が目をそむけなくなる自殺というテーマにあえて挑んだ痛快エッセイ集。本書には著者自身の不倫や借金ネタなど、これまた笑えないはずのどん底ネタが飄々とした文章で綴られている。読者をクスッと笑わせるユーモア溢れる一冊だ。

1,728円（本体1,600円+税）



配になっちゃって。あと、Twitter上に「何時に〇〇書店に行きます」と告知すると、読者の方が本を持って待っていてくれることがあるんですよ。そういった読者との交流も楽しかった。こうした人との交流がこの歳になってできたことは良かったと思います。本当に手渡しで売っているような感覚がありましたから。中には吉祥寺にあるブックス・ルーエさんのように、「末井昭選書フェアをしましょう」という申し出をしてくれる書店もありました。プロモーションが広がっていくのを目の当たりにするのは本当にうれしいですね。

——書店側からのフェアの依頼だったんですね。そうなんです。これがフェアの時に配った冊子なんですけど、「末井さんが大事にしている『自殺』に寄り添う11冊」と題して僕が選んだ11冊と、『自殺』と一緒に並べてコーナーをつくってくれました。そのブックス・ルーエさんのフェアをきっかけに営業の方がこの選書11冊をパッケージとして、各書店に働きかけてくれたんです。それを見た取次ぎのトーハンさんも選書フェアを仕掛けてくれて、結果、30軒くらいの書店さんがやってくれているんですよ。そうすると、できればネット書店で内容も見ないで買うよ

り、書店で手に取って見てから買って欲しいと思うようになりましたね。

——これからも書店まわりは続けますか？

はい、その予定です。名古屋よりも西の書店をまわれないので、これからは関西、九州地方もまわりたいですね。

——最後にひとつ、ご自身も編集者だった末井さんだからこそ伺いたいのですが、今の若い編集者に言いたいことはありますか？

う～ん。言いたいことは山ほどあるんですけど、一番言いたいのは、人と会うことを大切にしてほしいということ。最近は、人と直接会わずにメールのやりとりで済ましてしまう編集者もいますが、それでは面白いことは出ません。アイデアは何気ないムダ話から出てくることが多いから、人と会って話した方がいいです。僕は人見知りなので人と会うのは苦手だったんですが、編集者は会いたい人に会える仕事なんだから、その機会を生かさないとはいかないと思ってどんどん会いに行きました。チャンスを逃したらもったいないですよ。メールのやりとりはビジネスみたいな感じですけど、会えばその人の性格もわかるし面白いところも見えてきます。ぜひ、人と会うことを厭わないでほしいですね。

末井さんが大事にしている『自殺』に寄り添う11冊



今回『自殺』の発行にちなんで、生と死にまつわる本を10＋1冊選ばせていただきました。どれも僕が読んで心に響いたり、笑ったり、『自殺』を書く上で参考させてもらった本です。（僕は別に、誰は好きなんです）

どの本にも共通していることは、絶望の中の希望というか、ネガティブなことをポジティブにしていける力ではないかと思えます。そして、ネガティブをポジティブにすることが、いま一番必要なことではないかとも思っています。

僕たちは悲しむばかりじゃなく、これらもぜひ読んでほしい。笑顔を少しでももたらしてほしい。末井 昭



(左) 全国展開の選書フェアのPOP  
(中) 吉祥寺ブックス・ルーエの花本武さんと  
(右) ブックス・ルーエでの選書フェア



(左) 全国展開の選書フェア冊子  
(右) 紀伊國屋書店新宿南店の神矢真由美さん、佐貴聡美さんと

編集の現場探訪 Vol.16

株式会社カルチャー・プロ  
http://www.culture-pro.co.jp

1976年設立。学習参考書・学校・家庭用教材などが中心の編集制作集団。主要5教科の英語・数学・国語・理科・社会だけでなく、音楽・保健体育・道徳といった幅広い教材の編集制作に従事している。また、90年代よりデジタルメディアの教材開発に着手した実績から、ICT機器に合わせた教材開発も得意としている。



# 紙媒体でもデジタルメディアでも 教育哲学を持つ教材編集者であれ

株式会社カルチャー・プロ 代表取締役 須藤 靖夫 Yasuo Sudo

## 英語教科の編集から 全教材の総合編集制作会社へ

当社は、1976年の創業以来一貫して学習参考書などの副教材を専門とした編集制作に従事してきました。1980年頃は、大手教育図書教材会社でも編集制作を外部委託するという文化が根づいておらず、受注するまで大変苦労しましたが、正確な編集活動が実を結び、徐々に私どものような存在が版元さんにも認められるようになりました。私たちが初めに取り扱った教科は、英語教科が中心。たとえば、学研ネクストさんが発行する家庭教育の月刊誌『マイコーチ』や新学社さんが刊行する『ポピー』ベネッセさんの『チャレンジ』などが代表的なものです。こうしたシリーズものの教材を編集することで、版元さんと信頼関係を構築し、息の長いおつきあいをさせていただいております。

現在は、「約束は必ず守る」など誠実な編集態度が評判を受け、英語だけでなく、主要教科の数学・国語・理科・社会、そして特別活動の教材編集まであらゆる教材開発のご依頼をいただけるようになりました。

## 教材の編集制作会社に 問われる経営手腕

学習参考書編集業務の繁忙期は一般書のそれとは異なり、数年に一度大きな山場を迎えます。教科書の改訂は4年に一度というのが基本であり、この時期に学習参考書などの副教材も一斉に改訂されます。ですから、版元さんからのご依頼もこの時期に集中し、繁忙期を迎えるのですが、改訂作業が終了すると一気に受注量が激減してしまう。そのため、この狭間の年をどう穴埋めするかこそ、教材の編集プロダクションの経営手腕が問われるところなのです。私たちは、こうした狭間の年にも安定的な売上げを確保するために、教科書改訂とは別のサイクルで進行する学習指導要領に準拠した教材開発を行い、デジタルメディアの教育コンテンツ開発に従事してきました。

近年、にわかにな注目され始めた感のあるデジタルメディアですが、当社ではパソコン黎明期であった90年代にはすでにデジタルメディアによる教材開発を行っていました。そこで培ってきたスキルを生かして、新たな教育コンテンツの開発に意欲的に取り

組んだ結果、近年はデジタルメディアの制作依頼が着実に増え、当社の業務の大きな柱のひとつとなっています。

## 教育哲学を持ち、 常に原点に立ち戻る姿勢

教材編集者は、編集のバックボーンとして教育哲学を持つことがとても大切。教育哲学の背景は認知心理学が大本にあり、基本的な学習の流れというのがあります。教材の基本的な流れは、初めに動機づけ教材があり、2番目に学習教材、3番目に訓練教材、4番目に評価教材がある。こうした一連の流れを理解し、版元さんが求めている教材コンセプトがどの位置づけのものなのか、あるいはこれらのすべてを網羅したものなのか、常に俯瞰的に見通す視点も持ち合わせていなければなりません。社員にはこうした構造をしっかりと把握した上で企画を提案する癖を身につけるよう指導しています。日々の業務では編集作業に没頭するため、大局的な視点で自らの業務を眺めるのは難しい。ですから、一日の中でも、原点に立ち戻る癖を身につけて、真の教材編集者を目指してほしいと思います。

## 制作現場に聞く

AJEC会員社 株式会社カルチャー・プロで活躍する社員の方に仕事について伺いました。



中川 克也  
Katsuya Nakagawa

大学院で天文学を専攻し、博士号を取得。天文学といえば望遠鏡で天体を観測するというイメージがあるが、中川さんは天体力学をベースに数学を用いて天体の軌道を計算する理論屋。大学院卒業後、研究者を目指すのが、編集の仕事に魅了されて編集者となった逸材だ。

## 子どもの学びを支える縁の下の力持ち

主に算数・数学・理科の学習参考書を編集しています。最近、担当したのは日本数学検定協会が発行する『実用数学技能検定 要点整理 算数検定』。いわゆる“数検”と呼ばれる検定試験の対策教材です。数検対策の教材としては過去問題集は多く出版されているのですが、これといった参考書がありませんでした。そこで、「認知度をもっと上げて受検者を増やしたい」という日本数学検定協会のご要望から、オリジナルの参考書を作ることになりました。こちらは原稿作成から編集までを請け負ったので、数学専門のライターとともに過去問を分析。そうして、出題傾向を把握した上で、本文に反映するよう工夫しました。

そもそもこの世界に入ったのは、自分が教科の勉強が好きだったから。しかし実際に編集に携わってみると、問題をつくって解くという作業だけでなく、自分が学生時代には意識していなかった表記ルールや使用している教科書ごとに異なる学習進度に合わせた問題づくりなど、きめ細かい工夫が必要な仕事だということがわかり、教材編集の奥深さに惹き込まれていきました。しかも、学習参考書の編集

は間違えることは許されませんので、常に緊張感を持って取り組んでいます。最近は教科書的な問題だけでなく、教科書で習ったことを実生活に応用して考える活用力が求められています。こうした活用問題を思いつくのは、会社でパソコン画面を前にして考えている時よりも、バスに乗って運賃表を目にした時など日常の何気ない瞬間だったりします。そこで日常生活でもアンテナをたて、引き出しを増やすように心がけています。

現在は、理数課のチームリーダーとして3人の若手を束ねる立場。今後はチーム力を生かして、新たな書籍づくりに挑戦していきます。



菊池 由里  
Yuri Kikuchi

2007年入社。趣味は海外旅行で、世界史が大好きという菊池さん。世界史の教科書と旅行先が舞台となった本を旅行先で読んで、その土地の歴史文化に思いを馳せるのが至福のひとつなんだとか。

## すべての教科の基本は国語にあり

私は、国語教科の学習参考書や模擬テストなどの編集を担当しています。最近編集したのは『今解き教室』という塾教材です。これは朝日新聞社が発行元で、新聞記事で読解力を身につけながら時事を学ぶという主旨でつくられました。現在レベル1・2、小論文が発行されている。レベル1・2は主に小学生向け。ですから、新聞を読み慣れていない子どもたちのために、ルビや注釈・図版などをふんだんに取り入れ、読みやすいように工夫してあります。また、素材がすべて新聞記事であるため、普通の教材では取り上げない事件などのセンシティブな内容も記載できる反面、子どもの精神負担になるかもしれないという心配もあります。ですから、問題提起の仕方や構成にも十分に配慮しました。

国語編集の難しさは、なんといっても編集者自身の国語力が問われるところ。いくつもの正解が存在する教科なので、曖昧な質問は許されません。たとえば登場人物の心情を問う場合、「心情の変化はここに根拠がある」と説明できないといけません。入社したばかりの頃は物語の核にならない箇所にも傍線を引いて質問し、監修となる先生に注意

を受けたこともあり。でも文章の構造を意識して日夜訓練をすれば国語力は確実に上がる。それを編集者として肌身で実感しているのだから、「国語なんて勉強しなくても大丈夫」と思っている子どもたちに、「そうじゃない」と伝えたいです。それから、「国語はすべての教科の基本であり、国語の勉強はすべての教科の底上げにつながる」ということも。

今普及が進むデジタル教材では、音声や図版、映像を効果的に用いることのできる他教科に比べ、国語はアプローチが難しいと思います。けれど、さまざまな視点から子どもに訴えかけられる国語教材をつくれるよう、日夜努力しています。

